様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　６月２０日現在

機関番号：３２６８５
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：２００９～２０１１
課題番号：２１５００７１４
研究課題名（和文）　乳幼児の心理的拠点形成と保育環境に関する研究
研究課題名（英文）　Psychological formation and childcare environment on early childhood care and education

研究代表者
齋藤　政子（SAITO MASAKO）
明星大学・教育学部・教授
研究者番号：90279810

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、全国の保育者 1338 名に対する三歳未満児の保育環境についての意識調査と 1 歳児の慣れ過程の観察を通して、「ひと」「もの」「空間・場」がどのように心理的拠点として機能しているのかを明らかにすることである。（１）意識調査の結果では、「ひと」関連の項目の平均値のほうが「もの」「空間・場」関連の項目よりも有意に高かった。（２）新入園児の慣れ過程では、ままごとコーナーという「場」やおもちゃ・家具などの「もの」が情報や意味を子どもに提供し,子どもの行動に影響を与えていた。そのため、「ひと」の役割だけでなく、「もの」「空間・場」が 3 歳未満児の遊びと生活を支えるという役割の認識が重要であることが示唆された

研究成果の概要（英文）：This study aims to shed light on how “people”, “objects” and “places” function as a psychological base through the process of acclimatization observed in 1-year-old babies and questionnaires about the childcare environment of toddlers (children under 3 years of age) directed to 1338 childcare workers in Japan.
１）The results of the questionnaire showed that “people” was rated as significantly more important than “objects” or “places”.
２）For new children in the process of acclimatizing to the childcare environment, “places”, such as the playhouse corner, and “objects”, such as toys and furniture, influence the child’s actions because they provide information and meaning.
Therefore, this suggests the necessity of recognizing not only the role of “people”, but also that of “objects” and “places” in supporting the life and play of children under the age of 3.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２１年度	700,000	210,000	910,000
２２年度	600,000	180,000	780,000
２３年度	600,000	180,000	780,000
総　計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：総合領域分野
科研費の分科・細目：生活科学・生活科学一般
キーワード：３歳未満児保育、心理的拠点形成、保育環境、遊びの主体形成、生活の主体形成

１．研究開始当初の背景
（１）3 歳未満児保育においては、子ども同士の集団的共感の場を創っていくだけでなく、ひとり一人の子どもたちへの個別的配慮が必要であることは、近年の保育研究の蓄積の中で認識されつつあった。しかしながら、乳幼児集団保育における心理的拠点形成が、保育環境全体の中でどのようにすすめられているのか、「人」だけでなく「物」や「場所」が心理的拠点になりうるためには、どのようなシステムと条件が必要なのか、3 歳未満児が存在するが設置目的の違う乳児院の集団保育では、心理的拠点形成と保育環境との関連はどうあるべきなのか、などについては、解明されているというのは不十分であった。
（２）保育所では、１１時間開所を前提とした朝・夕の延長保育を行う保育所が増加する一方非正規雇用の保育者も増え、保護者が我が子の担任に会いにくいという現状も存在し、乳児院では厚生労働省の通達を受け、小規模グループケアが推進されつつあるが、実際に家庭に近づけることの子どもにとっての意味について解明されているとは言えない状況にあった。
（３）また、欧米では、食・寝・遊の分離がクラスごとに行われ、プロジェクトによるコーナーを設置する保育する保育が見受けられるが施設によって、設備・教材に開きがあることが知られている。ＯＥＣＤの調査『Starting Strong ECEC, Education and Skills』と『Starting Strong Ⅱ ECEC』では、3 歳未満児保育の質の問題が重視され、職員の質の向上やプログラムの検討などが議論されている。わが国では、保育所保育指針が告示・改定され、欧米と同様に保育の質の更なる向上が課題となっている。しかし、欧米でも日本でも 3 歳未満児の心理的拠点と保育環境との関連について類似の調査は見当たらない。

２．研究の目的
本研究では、上記の問題背景を踏まえ以下の３点を明らかにすることを目的とした。
（１） 3 歳未満児保育の行われている、保育所において、心理的拠点形成をすすめる工夫をどのようにおこなっているのか、保育環境―特に人的環境と物的環境の両面―から調査をする。観察法・質問紙法によって資料を収集し、実態と問題点を明らかにする。
２． 心理的拠点としての「人」「物」「場所」の機能、乳幼児にとっての発達的意味を明らかにする。その際、３歳未満児保育における、人間関係のあり方、保育環境のあり方、および保育者の役割を、乳幼児の心理的拠点形成と発達のプロセスにそって考察する。

３．研究の方法
（１）当初の予定では、面接法によって直接保育者に対しフォーカスインタビューを行う予定であったが、準備不足により実施できなかった。その代わり、首都圏の保育所のみを対象とするのではなく、インターネット上に公開されている全国保育所一覧の名簿から２段階層化抽出法によって 1177 園を抽出し、４部ずつ質問票を入れ調査依頼状を送付した。公私立合わせて 293 園から返信があり 1338 人の有効回答数があった。また、都市部Ｋ市の社会福祉協議会・保育会の協力を得て、市内の認可・無認可全園を対象とした調査も行った。３歳未満児の生活とあそびを支える保育環境に関する調査用紙は、岩立他（1997）の「保育者の評価に基づく保育の質尺度」20）や T.Harms 他著：埋橋玲子訳（2004）の保育環境評価スケール乳児版、全国社会福祉協議会（2009）の「機能別にみる環境・空間の設え：ガイドライン」などを参考に 64 項目を作成した。内訳は、「ひと」に関して 25 項目、「もの」に関して 19 項目、「空間・場」に関して 20 項目となっている。本研究では、物的空間的環境の意味について調査する意図があるため、「ひと」に関する項目よりも、「空間」「もの」に関する項目が多くなっている。これらの項目について、理想としては重要だと考える度合いと、実態として行っているという度合いをそれぞれ 5 段階評定で選択する調査を行い結果を分析した。

（２）東京都Ａ保育園の１歳児クラスの新入園児の慣れ過程を 2010 年４月から 9 月まで観察し、「ひと」「もの」「場・空間」の慣れにおける役割について事例分析を行った。また、東京都Ｂ保育園 1 歳児クラスと 2 歳児クラスの遊び場面の観察および、Ｃ保育園の異年齢クラスにおける 1 歳児の朝の遊びの観察をおこなった。
（３）神奈川県Ｄ乳児院における 1，2 歳児の遊びの観察を行い、本体と小規模グループ

ケアにおける子どもとおとなの行動の違いを分析し、「ひと」「もの」「場・空間」とどのような関連があるのかを分析した。

４．研究成果

（１）の質問紙法による、保育者を対象とした３歳未満児の保育環境に関する意識調査は、単純集計結果を、科学研究費調査研究報告書（明星大学）に掲載し、実態（実施度）と理想（重要度）とを比較した分析結果を明星大学研究紀要―教育学部―第２号に掲載した。回答者の年代、保育者歴、勤務形態、回答者の所属する運営主体は、以下の表１，表 2、表 3、表４の通りであった。

表１　回答者の年代

回答者の年齢	実数	割合
①２０歳未満	6	0.4%
②２０代	458	34.2%
③３０代	385	28.8%
④４０代	250	18.7%
⑤５０代	218	16.3%
無回答	21	1.6%
総計	1338	100.0%

表２　回答者の保育者歴

保育者歴	実数	割合
①5 年未満	349	26.1%
②5 年以上 10 年未満	312	23.3%
③10 年以上 15 年未満	213	15.9%
④15 年以上 20 年未満	167	12.5%
⑤20 年以上 25 年未満	90	6.7%
⑥25 年以上	181	13.5%
無回答	26	1.9%
総計	1338	100.0%

表3　回答者の勤務形態

勤務形態	実数	割合
①常勤職員(担任)	1106	82.7%
②非常勤職員(担任)	117	8.7%
③パートタイム	36	2.7%
④その他	19	1.4%
無回答	60	4.5%
総計	1338	100.0%

表４　回答者の属する保育園の運営主体

運営主体	実数	割合
①地方自治体	549	41.03%
②社会福祉法人	698	52.17%
③財団法人	22	1.64%
④学校法人	9	0.67%
⑤株式会社	21	1.57%
⑥特定非営利法人	5	0.37%
⑦その他	8	0.60%
無回答	26	1.94%
総計	1338	100.00%

全質問項目の平均値は 4．26 であり、「ひと」に関する項目は総体的に有意に高く、「もの」「場・空間」に関する項目は有意に低かった。3 歳未満児の生活とあそびを支える保育環境に関する 64 項目について、各項目ごとに平均値と標準偏差（ＳＤ）を計算し平均値上位 10 項目と下位 10 項目をまとめたものを見ると、「29 子どもが思いきり走り回ったり追いかけかくれ遊びができるような園庭がある」「23 子どもたちの午睡の場所はだいたい決められている」「27 子どものわかるところにゴミ箱があり、1 歳児以降の子どもは自分で捨てることかできるようになっている」の上位三つの項目は空間・ものに関する項目であった。これらは、実態調査（実際に行っているものを選択する調査）では、35 位 10 位 27 位に下がっているが、「ひと」項目である項目 25 と項目 61 は、重要度も実態も上位に①している。　一方、最も平均値の低い項目は、「子どもの絵は破れないような配慮をして見えるところに展示してある」次が、「マイ人形やマイバッグなど、何らかの個人用おもちゃを用意している」三つ目に低い項目が「授乳用のソファアなど、おとなと子どもか快適に接するための家具が置かれている」となっており、これらの項目は、実態調査でも、下位の 3 項目であった。これは、重要であると考えられていないために、実際にも実施されていないということであると考えられる。

さらに、保育者を対象とした 3 歳未満児の生活とあそびを支える保育環境についての調査データを、重要度調査のみ因子分析した結果、**「子ども目線で空間を構成していくこと」や、「保育者自身のコミュニケーション力やあそびの構成力」、「子どもの個別のニーズに応じた様々な配慮や応答的な働きかけ」、一人一人の子どもに一つずつ用意された「個別のおもちゃを尊重すること」、**という四つの要因が、共通因子として浮かび上がった。（重みなし最小二乗法、プロマックス回転）

全体として集計結果からは、「もの」項目「空間」項目といった、物的空間的環境に関する項目については、「ひと」項目に比べ、

保育者が重要だと思っても実際に実施されていない可能性が示唆された。この点については、別の角度からの分析を行い検証したい。また、年代や保育者歴、勤務形態、運営主体などとの関連性を調べると共に、あらゆる角度から検討し、意識調査結果のデータ、観察調査結果のデータの分析を進め、結果を公表していきたい。

（２）保育園の新入園児の慣れ過程では、ままごとコーナーという「場」やおもちゃ・家具などの「もの」が情報や意味を子どもに提供し,子どもの行動に影響を与えていた。

そのため、「ひと」の役割だけでなく、「もの」「空間・場」が 3 歳未満児の遊びと生活を支えるという役割の認識が重要であることが示唆された。また、乳児院の小規模グループケアと本体の保育との比較では、エピソード分析から**「大人の生活活動の理解と模倣」と「生活を再生産する活動の理解」「様々な道具の理解と使用」「仲間意識の広がりと共感の渦」**の四つが抽出された。24 時間乳児院で生活している子どもたちにとって、大人の生活活動を理解することは、その施設の養育方針・保育方法など様々な条件に左右される。乳児院も、保育所も、子どもが生活する場所であって、大人が生活する場所では基本的にはないからである。しかし、「生活活動」を子どもが子どもなりに理解し、生活を繰り返していくことの重要性を認識することは、生活主体と遊び主体とを統一させて形成していくためにも重要である。

また、主体形成は、保育者の単なる心がけや言葉かけだけでなく、「意図」を「もの」に潜ませて創意工夫をこらすことが必要である。本研究では、愛着対象として最も最重要と考えられてきた担当保育者という「ひと」が子どもの心理的拠点となるだけでなく、前の晩から関わってくれていた保育者が拠点となったり、「お気に入りの服」や「自分がわかるということ」や「遊びそのもの」が子どもが活動を推し進める際の心理的拠点となることが示唆された。しかし、これらの心理的拠点が、生活活動の理解や仲間との遊びへの参加に関連しているとしても、どのようなメカニズムでどの程度関連しているのかについては、検討の余地がある。今後は、乳児院の養育の特徴を踏まえ環境構成のあり方について、保育所と比較しつつ分析を進めていきたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）
①齋藤政子、乳幼児期の生活主体形成と心理的拠点形成としての保育環境－乳児院における小規模グループケアの取り組みから－、査読有、明星大学研究紀要―教育学部―創刊号、2011、85-100
②齋藤政子、3 歳未満児の保育環境に関する保育者の意識の実態、明星大学研究紀要―教育学部―第２号、査読有、2012、91-105

〔学会発表〕（計４件）
①齋藤政子、3 歳未満児の心理的拠点形成と保育環境：乳児院における小規模グループケアの取り組みから、日本保育学会第 63 回大会発表論文集．2010、326　発表番号 246
②齋藤政子、3 歳未満児の心理的拠点形成と保育環境：保育園１歳児クラスにおける心理的拠点としての「人」「物」「場所」の役割、日本発達心理学会第 22 回大会発表論文集、2011、発表番号Ｐ5-059
③齋藤政子、3 歳未満児の心理的拠点形成と保育環境―1 歳児の園生活への慣れ過程の分析から―、日本保育学会第 64 回大会発表論文集、2011、発表番号 114
④齋藤政子、3 歳未満児の遊びと生活を支える保育環境の実態―保育者を対象とした保育環境の「重要度」調査の分析から、日本保育学会第 65 回大会発表論文集、2012、

〔図書〕（計１件）
浅見均、齋藤政子、他、大学図書出版、子どもの育ちを支える子どもと環境、2012、28-33

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
齋藤 政子（SAITO MASAKO）
明星大学・教育学部・教授
研究者番号：90279810

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし